

ネルーとガンディーの対話—交換書簡を通じて

内藤 雅雄

はじめに

1964年5月27日にインド初代首相ジャワハルラール・ネルーが病死してから今年で50年である。当時切り抜いた日本の新聞の記事を見ると、数日間各紙とも葬儀の模様やネルー亡き後のインドやアジアの状況に関する論説・解説に何ページも費やしている。晩年のインド国内、またAA諸国内における指導力の低下を指摘する記事も目立つが、戦後の日本社会に見られたネルーへの関心・評価の高さが伝わってくる。

ところで戦後の日本人にとってネルーは、新興国インドの最高指導者、国際的には一時代を画した非同盟運動の代表的牽引者としてだけでなく、インドの政治はもとより社会や文化を文章によって伝えてくれる思想家でもあった。反英運動の終盤に獄中で書かれた主著 *The Discovery of India* (原著初版1946年) は1950年代に邦訳 (『インドの発見』、辻直四郎・飯塚浩二・蟬山芳郎訳、岩波書店、全2巻、1953～56年) が出版され、ネルー存命中に刷りを重ねた。最も激しい闘争過程にあった1930年代にやはり獄中で執筆された *An Autobiography* (原著初版1936年) も、訳語に多少難があるが1961年に邦訳 (磯野勇三訳『ネール自伝』、立明社、全3巻) が出ている。インド人のみならず世界のさまざまな友人・知人との間の書簡を集めた *A Bunch of Old Letters* (原著初版1958年) は『忘れ得ぬ手紙より』としてその第1巻が1961年に出て、訳者 (森本達雄) から直接ネルーに手渡された (邦訳第3巻「訳者あとがき」) が、最終巻の出版は1965年であった。娘インディラーに獄中から独自の世界史を綴って送った書簡 *Glimpses of World History* の邦訳『父が子に語る世界歴史』 (大山聰訳、みすず書房、全6巻、1965～66年) は残念ながらネルーの死後に出版された。

日本人によるネルー伝記・研究にふれておこう。ネルー存命中に出た伝記として坂本徳松『ネールー人間・思想・政策一』 (日本出版協同、1952年) がある。坂本は子供向けに『ネールー平和と独立の指導者』 (岩崎書店、1958年) も書いている。ネルー死後の最初のものは木村毅『ネールー独立と人類愛に生きた生涯』 (旺文社、1965年) かと思われる。1966年に出版された中村平治『ネールー・人と思想』 (清水書院) は新書版ながら、ネルーの政治家としての側面はもちろん、彼の社会・文化観および歴史論にもそれぞれ一章を割いて記述しているのが新鮮な印象を与えた。その後、ネルーに関する特定テーマの論文はいくつか書かれるが、まとまった伝記・研究書は出ていない。

前置きが長くなったが、本稿ではネルーの文章の中でも特に書簡に焦点を当て、長い民族解放運動の中でとりわけ身近でともに行動した M.K. (マハートマー) ガンディーとの間で交わされた書簡に依りながら 2 人の関係を改めて振り返ってみたい。書簡に絞ったのは、公的な場での発言とは異なり両者の細やかな、時には赤裸々な感情の表明が見られることに注目したからである。特に直面する状況に関する評価がかみ合わなかったり、衝突した時の両者の言葉のやりとりからは重々しい苦悩や張りつめた緊張感が伝わってくる。

1. 最初の反発

数年前、彼らの間で交わされた書簡を 2 人のインド人女性がまとめ、『彼らはともに戦った』⁽¹⁾と題する大部な書物として出版した。実は彼らの書簡はすでに著作集⁽²⁾にほとんど収められ、またガンディーの晩年の秘書ピャーレーラールによる記録『マハートマー・ガンディー―最後の局面』⁽³⁾の各所で 2 人の書簡に言及されている。先にふれたようにネルーが多くの著述を残しているのに対し、ガンディーの場合まとまった著作は数少ないものの驚くほど精力的に書簡を書いた。同じ日に同一人物に対して 3、4 通の書簡を出すこともまれではなく、彼の著作集に収められた書簡の数は（電報は除いても）2 万通はくだらない。最近出版された上述の書簡集の特色は、合計 479 通の書簡（電報 75 通、短い手記 5 通を含む）を年代順に並べ、返信がある場合はそれもすぐあとに配置しているので 2 人の考え方やその変化を辿るのに大変便利なことであろう。詳細な脚注も、それが書かれた状況を知る上で有用である。ただ 479 という数字は必ずしも両者間の全書簡数と言うわけではなく、著作集にあってこの書簡集にないものもあり、また書簡中に「○月○日の書簡」「先だつての書簡」とあるものについても「入手不能 (Not available)」という脚注が付されているものがあって、散逸した書簡も相当あることが分かる。（以下、書簡の引用に当たっては、敬語など表現の煩わしさを避けるため文章はすべて「である」調とした。）

ネルーが法廷弁護士の資格を得て 7 年ぶりに帰国したのは 1912 年である。当時のインドは 1905～8 年のベンガル分割反対闘争が終焉し、会議派内の穏健派と呼ばれる勢力が主導権を握っており、ネルーはその状況に満足していなかったことが『自伝』から知れる。しかし世界大戦勃発後の 1916 年には急進派が復帰し、同年の会議派ラクナウ大会では歴史的なムスリム連盟との提携（ラクナウ協定）が成立した。『自伝』によれば、ネルーがガンディーと初めて会ったのはその大会のころだったという。当時ネルーの目にはガンディーは未だ、南アフリカにおけるインド人労働者救済の英雄というイメージが強く、会議派を含めてインド政治に余り関心のない人物として印象づけられたようである。しかし 1919 年のアムリトサル虐殺事件

やローラット法案への反対を掲げる非暴力的不服従運動(サティヤグラハ運動)がガンディーによって開始されると、ネルーは直ちにこれに参加している。この時期ネルーはガンディーに対して、活動の中心だった連合州(ほぼ現在のウッタル・プラデーシュ州)での不服従運動や労働者のストライキに関する電報2通(1921年5月9日、17日付)と、同州での農民運動や労働運動に対する当局の抑圧状況、および同州でのスワデーシー(国産品奨励)運動に関する2つの短信(1921年8月、11月。これら短信は上記アイヤングールたちの書簡集にはない)を送っている。ネルーは11月の短信で、運動の非暴力性を強調し、チャルカー(手紡ぎ器)とスワデーシーがイギリスの支配を終止せしめる唯一の手段であると強く主張しており、当時ネルーがガンディーの思想に深く共鳴していたことが分かる。

ネルーは同年12月にイギリス皇太子訪印ボイコットなどの廉で最初の入獄を経験するが、獄中でガンディーの対応に初めて疑問を感じる。サティヤグラハ運動が全国的に高まっていた1922年2月4日、連合州の小村チャウリー・チャウラーで抗議デモを行っていた農民たちが警官隊の発砲に反発して、警官たちが逃げ込んだ警察署に火を放って22人の警官が焼死するという事件が起こった。この「暴力」に対して、ガンディーは直ちに会議派運営委員会を召集して運動の停止を決定した。獄中にあったネルーら若い活動家たちは、反英運動の気運が高まるこの時点での停止命令に強い反感を示した。彼は当時の自らの反応について『自伝』に次のように記している。

チャウリー・チャウラー事件後われわれの運動が唐突に停止されたことは、ほとんどすべての主だった会議派指導者—もちろんガンディー—以外の一を憤慨させたと思う。私の父[モーティラール]はそれに痛く困惑した。より若い人々は当然ながらいっそう困惑した。…何よりもわれわれを悩ませたのは、この停止令に付された理由とそれに付随する結果であった。チャウリー・チャウラーは嘆かわしい事件であり、非暴力運動の精神に反するかも知れない。しかし、ある遠くの村の一群の昂奮した農民がわれわれの解放闘争を一少なくともある期間—終わらせるものなのか?もしこれがある散発的な暴力的行動の不可避免的な結果であるなら、非暴力闘争の哲学と技術に確実に何かが欠けているということだろう。何故ならそうしたある不運な出来事に対処する保証は不可能だと思えるからである。われわれが前進する前に、3億に及ぶインド人に非暴力的行動の理論と実践の訓練を施さねばならないのだろうか?たとえそうでも、警官からの極端な挑発に完全に平穏でいられるかどうか言える者が、われわれの中に何人いるだろうか?⁽⁴⁾

事件の十数年後に書かれたこの『自伝』の時点では、ネルーは1930年3月の「塩の行進」で始まる第2次サティヤグラハ運動を経験している。従って上の文章に続けて、1921～22年には1930年代の運動と比べると強力な組織と規律を欠き、指導部のほとんどが投獄されてし

かも大衆は運動を遂行する訓練をほとんど受けていなかったという状況を反省しつつ、次のように書いている。つまり、1922年に運動があれば以上進めば散発的暴力が各地で起こり、血腥い政府の鎮圧と引き続く恐怖政治が完全に人々の士気を奪ってしまうことなどが「(運動を中止させた)理由としてガンディーの念頭にあり、彼の前提や非暴力の手段で運動を遂行する妥当性を考えれば彼の決定は正しかった」と。実はネルーは『自伝』ではふれていないが、1922年の事件後獄中の活動家たちが運動停止に不満を募らせるのを憂慮したガンディーが獄中のネルー宛に(妹のヴィジャエラクシュミーを通じて)書簡(1922年2月19日付)を送っている。これは残っているガンディーからの最初の書簡である。ガンディーは其中で、各地から届く規律を無視した民衆の好戦的な動きを伝え、暴力的気運が広がる所に「チャウリー・チャウラー事件のニュースが火薬に点火する強力なマッチのように飛び込んできた」とし、もしそのまま停止されなければ本質的に暴力闘争を導いただろうと説明している。そして自らの南アフリカでの投獄経験に照らして、獄中の人間は外での出来事を正確に掌握できず、牢獄から運動を指導することは不可能だとして、「外界のことは頭から完全に追い払い、その存在を無視せよ」と説いた。その上で、獄中ではチャルカーとヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』に集中するよう勧めている。最後の部分をネルーがどう受け取ったかは不明であるが、国内状況に関するガンディーの説得はネルーにそれなりの影響をもたらしたようである。

2. ネルーの政治主導性とガンディー

1927～29年という時期は、反英運動におけるネルーの位置が確固たるものとなる重要な画期となった。1926年3月に妻カマラーの病氣療養のため随伴してヨーロッパに渡ったネルーは、翌年ブリュッセルで開催された被抑圧諸民族会議に会議派代表として参加しそこで結成された反帝国主義連盟の執行委員に選ばれたり、同年11月のロシア革命十周年記念にも招かれたりし、新しいヨーロッパの政情を肌で感じとった。このころイギリスは第1次世界大戦後に制定したインド統治法(1919年法)―イギリスはこれを「インド憲法」と称した―の10年後改訂の前に、1927年11月にその準備のための法定委員会を任命した。しかし、委員長の名を冠してサイモン委員会と呼ばれるこの機関は、インドの政治的将来に関わるものであるにもかかわらず、白人のみで構成されたことがインド人の激しい反発を喚んだ。同年12月の会議派マドラス(チェンナイ)大会において、党の書記長に選出されたネルーは進歩的な若手活動家の先頭に立って活発な動きを見せるが、最も顕著なのは「会議派の名においてインド人民の目標は完全な民族の独立であると宣言する」という完全独立決議案を提起したことであろう。しかも彼が採択を望む目標は「遠い将来の目標ではなく直ちに実現されるべきものである」ことを強調

している。⁽⁵⁾ 穏健なグループが目標とした「自治領の地位」―彼の父モーティヤーラールもこれを支持し、翌年 8 月に発表される「ネルー報告」で正式にこれを提起する―に對抗して 1920 年代に若い急進派を中心に完全独立の要求が次第に強まっており、ネルーのこの決議案はそれを代弁したものである。同案は決議として採択されるが、この大会に欠席していたガンディーの反対もあり、結局会議派として正式に「完全独立」を党の目標として掲げるには、ネルー自身が議長を務める 1929 年のラーホール大会まで俟たねばならなかった。

この時期に 2 人が交換した書簡がある。両方とも療養のためスイスに残ったカマラーの状態を思い遣る内容であるが、政治状況に関してはここでもかなりの食い違いが見られる。ガンディーの書簡（1928 年 1 月 4 日付）は、「私は自分が書かねばならないと感じている時にペンを抑制することは出来ない」という文章で始まる。これは前月の会議派大会で採択された数々の決議、例えば完全独立、サイモン委員会のボイコット、戦争の危機、中国の状況、反帝国主義連盟、憲法草案作成に関する諸決議にネルーが主導的役割を果たしたことが承服できないため、ガンディーはやむなくペンを執ったことを意味していた。続けてガンディーは「君は余りに早く進みすぎる。君はよく考え順応する時間を取るべきであった。君が立案した決議のほとんどはもう 1 年遅らせることが出来た」と述べ、今ネルーが果たすべき義務は規律ある党を築き上げること、数ある決議の中でヒンドゥー・ムスリムの融和・結束、「重要だが二義的なサイモン委員会ボイコット」に全エネルギーを注ぐことであると説いた。しかもガンディーは同じころ、自らが主宰する『ヤング・インディア』紙に「国民会議派」と題するマドラス大会批判の論説を掲載している。文章の後半で、最近会議派内で不規律が見られ、「無責任な議論や行動が今日の傾向」となっていて、マドラス大会での「(完全) 独立決議」などは「早まって立案され、無思慮に採決された」と断じた。更にこれらを論議した会議派議題委員会や全国委員会は「学校生徒の弁論クラブのレベルに落ちた」ものとさえ酷評している。⁽⁶⁾

これに対してネルーもさすがに憤慨したようで、かなり激越な内容の長文の書簡（1 月 11 日付）をガンディーに送った。初めにガンディーの会議派大会決議に対する批判に非常に困惑しており、「私には全く不当と思える言葉をあなたが用いているのを見るとよりいっそう私を呆れさせる」とその不満をぶつける。そしてガンディーは「一般的な言葉で議題委員会やいくつかの決議を難詰」しているが、それは会議に出席しないで少数の人々の印象に基づいて判断しているに過ぎず、「伝聞証拠に基づく判断は常に危険であることを指摘したい」と逆に諫めている。特にガンディーが「早まって立案された」と批判する「完全独立決議」は実際には国内で過去何年にもわたって論議されてきたし、「無思慮に採択された」というのも議題委員会が何時間もかけて討議した現実を無視するものであり、ほとんど全会一致で採択されたこの決議に賛成した委員会および会議派の党員はすべて「無思慮」であったのかと厳しい反論を突きつけた。完全独立に

対して主張される自治領の地位という目標については、「そうした見解そのものが私の息を詰まらせ首を絞める」とまで述べて改めてこれを拒否した。ガンディーが会議派党員を「学校生徒の弁論クラブのレベル」と評したのに対しては、「あなたは 1 人の怒れる教師のようにわれわれを難詰するが、その教師はわれわれを導いたり教訓を与えたりせず、ただ折々われわれのやり方の間違いを指摘してするのみである」と応じている。

この書簡でネルーは当面の会議派大会に関してのみならず、ガンディーの基本的な考え方にまで筆を及ぼしている。自分が、インドを勝利と独立に導き得る指導者としていかにガンディーを熱烈に賛美し信じているかを繰り返し述べつつも、彼の著作、例えば西洋文明の徹底批判を含む 1909 年の『ヒンド・スワラージ（インドの自治）』には全く賛同できないことも隠さない。またガンディーがカーディー（手織綿布）運動が急速に広がれば政治上の活動にも展望が開けると説いてきたことについても、

あり得ないことを成就させるあなたの驚くべき能力への信仰がわれわれを期待する気分に浸してきた。しかし私のような非宗教的人間にはそうした信仰は頼るには弱い葦であり、もしわれわれはカーディーがインドで一般化するまで独立を待つべきだとするなら、「グリーク・カレンズ（Greek calends）」まで（「無期限に」の意）待たねばならないだろうと私は考え始めている。…われわれのカーディー活動はほとんど完全に政治から離脱しており、カーディー生産者は自分の限られた分野以外に関わらない精神を育ててしまう。それは彼等の仕事にとっては良いことだが、政治の分野で彼らから望み得ることはほとんどない

と、ガンディーの重要な理念・活動に対して大胆な批判を展開している。ネルーからすれば、西洋文明の欠陥のみを攻撃し、インドは西洋から何等学ぶべきものがないほど過去に英知の頂点に達したとするガンディーの議論は承服できず、彼がしばしば口にする「ラーマ・ラージ（ラーマ王の統治）」つまり過去における良き統治という考え方への不信感がここに示されている。『ヒンド・スワラージ』に関するネルーの疑問はかなり強かったようで、のちにもガンディーへの書簡その他でこれを論じており、それについては後にふれよう。書簡の末尾でネルーは、ガンディーが半封建的ザミーンダリー（地主制）や労働者と消費者の資本主義的搾取に反対していないと指摘しているが、階級・階級闘争に関する 2 人の姿勢は終始接近せず、この後もしばしば書簡の中で論議される。

ガンディーはこれに対し 2 通の返書を送っているが、ネルーの書簡からかなりの衝撃を受けたことが感じられる。最初の書簡（1928 年 1 月 15 日付）の内容は、ネルーの 1 月 11 日付書簡への評価と、会議派大会出席のためマドラスに来て交通事故で入院しているイギリス独立労働党指導者フェンナー・ブロックウェイの状況の確認である。第 2 信（1 月 17 日付）では自分が会議派の委員会について述べたことにふれ、これまでも無責任で早まった論議や行動があった

時は常に同様に発言しており、決してネルーが考えるような誤りではないのだと主張する。次いである種の悲痛さを感じさせる文章が続く。

君が私と私の見解に対して公然たる戦いを行わねばならないことは私には明確に分かります。何故なら、もし私が間違っているなら明らかに国に対して癒し難い害を加えているのだし、それを知った君は私への反抗に立ち上がるのは君の義務だからである。

…君と私の間の相違は余りに広く極端に思えるので、われわれの間には交差する場がないようだ。常にこれほど勇敢で誠実、有能で廉直であった君のような同志を失うという悲しみを私は君に隠すことは出来ない。しかし大義に報ずるには同志関係も犠牲にされねばならない。

これに対するネルーの返書（1月23日付）も苦悩を滲ませている。その劈頭で、ガンディーの手紙が「衝撃であり、読むのが苦痛で」あり、しかも「非情な論理をもって私には可能と思われない事態を考えておられる」と難じつつ、同時にガンディーへの変わらぬ尊敬と愛情を披瀝する。ネルーが「公然たる反抗」を行おうとしているとの指摘に対して、自分はそのいかなる可能性も考えていないと否定し、その胸中を次のように語っている。

確かに私は私たちの間の見解の相違—しかも根本的のものかも知れない—について、またあなたの同意を得られない特定の事柄に関して私のやり方で行動することについて考えたことがある。しかし、たとえあなたに異議があっても、私が心の中で明確に確信しているなら、私が自分の線を進むことをきっとあなたも望んでおられると感じていた。たとえある点について衝突の可能性があっても、共有できる行動の場がかなりある他の多くの点にまでこの相違や衝突が拡大する必要は絶対にはないと思われる。…何が起こるにせよ、あなたへの私の深い尊敬と愛情を変えたり減じさせたりすることは出来ないと私が保証する必要があるでしょうか。その尊敬や愛情は確かに個人的なものであるが、それ以上のものである。…私は多くのことをあなたと語り合いたい。あなたと話をした後で現在の私の見解の多くを変えるか変えないかは言えない。私は自分の心や物の見方が頑なでないことを望み、あなたによって納得させられるなら、それは私には最も喜ばしいことである。

終わりの部分でネルーは、最近多くの新聞が彼の演説を伝えて「ネルーがガンディーを攻撃している」という記事を出したことにふれ、彼の言葉がしばしば（特にヒンディーで語ったものが英語で報道される場合）新聞は誤って伝えることがあるから、新聞記事のすべてをそのままには受け取らないでほしいと訴えている。

3. 不服従運動とネルー、ガンディー

翌 1929 年、ネルーは会議派ラーホール大会の議長に選出されるが、この時ガンディーはネルーの議長就任を推薦している。議長を中心とする会議派の中枢でもある運営委員会の構成についても彼はその草案をネルーに送っている（1929 年 11 月 18 日付）。12 月 29 日、初めて会議派議長として壇上に立ったネルーはその演説で「私は社会主義者である」、「インドは社会主義の道を進むべき」と述べ、熱烈に階級闘争の意義を語っている。従ってここでも直接、間接にガンディーの思想への批判を見て取ることが出来る。議長演説では特に農民・労働者問題の重要性を指摘し、

われわれは実際にはわが国全体の大義と同じである彼らの大義を支持することによって、彼らをわれわれの側に勝ち取ることが出来る。…会議派は資本と労働、地主と小作の間の平衡を保たねばならないと言われる。しかしこの平衡は以前も今も極端に一方に偏っており、不正と搾取を維持するものになっている。これを正す唯一の道は、ある一つの階級による他の階級の支配を排除することである

との自説を表明した。ただ植民地下という状況、また現実の会議派の構成（つまり党员として地主や資本家が強い発言力を有する）では完全な社会主義的綱領を採るのは不可能であるとしつつも、社会主義の哲学が全社会に徐々に浸透していることは事実で、問題はその実現に向かう前進のペースと手段であると訴えた。従って会議派としては今日非常に早く進むことは出来ないにせよ、究極の理想を念頭に置いて活動すべきで、問題を賃金や雇用者と地主によって施される慈悲に止めてはいけない。企業や土地問題における温情主義では悪は根絶できず、「ある人たちが主張する新たな受託論（theory of trusteeship）も同様に不毛である」と断じた。「受託論」とは資本家、地主あるいは金持ちを神の信託を受けたものとしてその良心に期待する考えで、ここに言う「ある人たち」にはガンディーも含まれていると見るべきであろう。続けてネルーは目標達成のための手段に言及し、「非暴力の偉大なる使徒（ガンディー）自身も、怯懦から戦いを拒否するよりは戦う方がよいとわれわれに語った」として、隷従から脱するための暴力的手段の可能性を示唆しつつも、最終的には会議派は平和的大衆運動の道を選択するものと宣言した。⁽⁷⁾ このラーホール大会で「完全独立」決議が正式に採択されたことは前にふれた。そのあと、大会は更にイギリスがこの要求を受け容れなければ大規模な不服従運動を開始すると宣言した。

一方ガンディーは、こういう時にもイギリス側との交渉の道を閉ざしていない。すなわち 1930 年 1 月に彼はインド総督に対して、「独立の内容」として「11 項目の要求」を提起した。その内容には全面禁酒、塩税廃止、高級官僚の給与引き下げ、軍事費の漸次引き下げ、外国製

衣料に対する保護関税、沿岸貿易関税留保法の制定、諜報機関（CID）の廃止、地税の 50%引き下げ等が含まれていた。総督がこれらの要求を満足させるなら、大衆の不服従運動を止めてもよいとの条件も付けられた。これが発表されたあと、ネルーはガンディーへの書簡（1930 年 2 月 3 日付）で強い不信感を表明している。

私は、あなたがイギリス政府との協力のリトマス試験紙として示した 11 項目を、ある驚きをもって読んだ。あなたがそれらとわれわれの当面の目標である独立をどう合致させるのか分からない。実際はそれらは自治領の地位にさえ遠く届かない。確かにそれらのいくつかは重要だが、所詮すべて個別の改良であり多くの根本的問題にふれるものではない。…あなたの 11 項目が譲歩されないことは疑いの余地なく、寧ろ多くの人々にショックを与えるのではと心配である。彼らは独立云々はただの戯言で真面目な話ではないものと考えてだろう。ガンディーのこれへの反応（2 月 9 日付）は極めて素っ気なく、ネルーは 11 項目の重要性を見落としており、それが自分たちの立場を強化するものとして満足するよう望むとだけ記した。ネルーはなおも別の書簡（7 月 28 日付）で「(11 項目は) 重要ではあるが独立に取って代わるものとは思えない」と抗議するが、これを「独立の本質」と譲らないガンディーによって振り切られた。

しかし、ネルーが予測した通りイギリス側はこれらの要求を拒否し、結局年 3 月にガンディーの指導下で有名な「塩の行進」に始まる第 2 次非暴力的不服従運動が全国的な規模で展開された。この時ネルー、次いでガンディーも逮捕・投獄されたが、イギリスはロンドンにおける英印円卓会議一同年の第 1 回会議には会議派は参加を拒否—への会議派の参加を画して取引する戦術を採った。ガンディーはこれを受け、1931 年 3 月に総督アーウィンとの間で成立した協定（デリー協定）の結果、不服従運動を一時停止し新統治法に関する論議に加わるため第 2 回会議に出席することとなる（この間、2 月にネルーの父モーティヤーラールが病死）。しかしさまざまな利害や思想の立場に立つインド人代表数十人の意見は特に選挙制度をめぐる分裂し、会議派代表としてその内の 1 人に過ぎないガンディーの声はほとんど影響力を持たなかった。ガンディーもインド人代表間の見解の不一致を繰り返し本国へ伝えた。本国にあってネルーは強い苛立ちと恐らく皮肉をも込めてロンドンのガンディーに書簡（1931 年 9 月 27 日付）を送っている。

あなたがイギリス政府や他の人々を、肝心な原則に関わる問題を議論するように同意させられないのを不満に思う。あなたが正しく私が間違っているのだろうが、同じ顔ぶれの年寄り連中がコミューナル問題（宗教別分離選挙制度）についての使い古されたおなじみの言い回しを繰り返し、あなたがこの無意味さにじっと耐えている様子を読むと、あなたの忍耐力に驚いてしまう。この雑多な連中と議論しまた議論し続けるあなたは何と素晴らしいことか。

会議は最終的に何らの結論にも達せず決裂しガンディーは 12 月末に帰国するが、翌年 1 月 4 日に逮捕されて 1933 年 5 月初旬までの 1 年半をプネー市郊外のイエラヴダー中央刑務所で過ごすことになる。

そのころからガンディーは自ら「建設的プログラム (constructive programme)」と名付ける社会改革的活動の一環としてハリジャン（不可蝕カースト、被抑圧カースト）の地位向上、差別廃止の運動に重点を置き始めていた。獄中にあった同年 2 月に『ハリジャン』という英文週刊紙を獄外の同志によって発刊させている。差別を許してきた自らを含むカースト・ヒンドゥー（ハリジャン以外のヒンドゥー）の罪を浄化するという目的で断食を開始するが、その日に釈放された。当時ネルーも別の刑務所に収容されているが、恐らくその断食を思い止まらせようとして送ったと思われる書簡（書簡自体は残っていない）への返答と、それに対するネルーの反論があり、そこにはハリジャン問題や宗教に関する両者の立場の相違が明瞭に見られる。5 月 2 日付書簡でガンディーは、断食を止めるようにとの忠告は無用であると斥けたあと、次のように続ける。

それ（断食）が絶対に必要だと君が理解してくれたと思えたらどんなにいいだろう。

ハリジャン運動は単なる知的努力が及ばないほど大きなものである。世界でこれほど悪いものはない。それでも私は宗教、従ってまたヒンドゥー教を棄てることは出来ない。ヒンドゥー教がなければ、私の人生はただの負担に過ぎない。私はヒンドゥー教を通じて、キリスト教、イスラームその他すべての信仰を愛する。それを取ってしまえば私には何物も残らない。それでも不可蝕差別を伴うそれ（ヒンドゥー教）には耐えられない。幸いにヒンドゥー教は悪に対する卓越した救済手段を持っている。私が断食を切り抜ければよく、また生きようとする努力にかかわらず肉体が消滅してもよいと君が思ってくれればと思う。…疑いもなく死はすべての努力の終わりではない。

ここに言う「ヒンドゥー教の救済手段」とは恐らく贖罪、つまりこの場合は罪の浄化を目指す断食を指しているかと思われる。これに対してネルーは電報と書簡（5 月 5 日付）を送っている。電報では、「あなたが唯一の目印である見知らぬ国に迷い込んだ気持であり、暗闇で自分の道を手探りしようとしてもつまずくのみである」と、自らの暗鬱な気持を伝えているが、一方の書簡ではガンディーの考え方への痛烈な反論を試みている。初めに、宗教が自分にとって親密な問題ではなく、歳とともに確実にそれから離れていくと述べ、「宗教は私には情緒と感傷に導くものに思えるし、またそれ以上に当てにならない指標である」としてガンディーの宗教観を完全に否定する。ハリジャン問題に関しては、それは大いに悪いものであることを認めつつもガンディーとは異なる視点を示す。

世界にそれほど悪いものはないと言うのは正しくないかと思える。それと同様に悪い、ま

たそれ以上に悪い多くのものを指摘できると思う。世界中にはさまざまな形態の同様なハリジャン問題がある。それは特別な原因の結果ではないのか。確実にそれは単なる無知と悪意以上の何かによるものである。これらの諸因を排除したり、あるいはその作用を無効化することが問題の根源に対応する唯一の道であるように思える。

ネルーはこの問題について同書簡でそれ以上論じていないが、明らかにガンディーの方法が根本的な問題解決に繋がらないことを指摘していると言えよう。

同様な両者の見解の相違は貧困や階級問題に関しても見られる。1933 年 9 月 13 日付ガンディー宛書簡は、1931 年の会議派カラーチー大会においてネルーが草稿して採択された「基本的権利と経済的变化」にふれつつ、一般大衆の生活向上の緊急性を訴えたものである。大衆の状況を向上させ、彼らを経済的に引き上げ彼らに自由を与えるためには、「インドにおける既得権益がその特別な地位とその特権の多くを放棄することが不可避」であるとし、その最大のものであるイギリス政府、インドの諸藩王そして地主などの利害を大衆に利するよう改めるところに独立達成の目的があると説いている。更に独立に関わるもう一つの問題として、ネルーはそれが現実の国際問題と不可分である点も強調する。これに対する返書で、既得権益の実質的な改変なくして大衆の状況の向上はあり得ないというネルーの議論に誠心誠意賛同するとしつつも、「手段の純粋さ」に重点を置くガンディーは強制を否定し、「われわれがわれわれの手段の無害さを示すことさえ出来れば、藩王、地主あるいはその存在を大衆の搾取に依存している者もわれわれを恐れたり不信を懐いたりすることはないだろう」として、あくまで「彼らを改宗させる」ことが長いが最も近い道であると主張している。これは「心の変化(hriday parivartan)」論として知られるガンディーの固執する特異な議論である。ネルーが指摘した国際問題に関しても、インドが世界の進歩的勢力と立場をとにもすることの重要さという点で同意するが、そのあと唐突に「二人の間には理想の表明では符合はあるが、両者には越えがたい気質上の相違がある」と書いている。ネルーが目標を可能な限り明確に規定しようとするのに対して、ガンディーはむしろ「目標への前進は手段の純粋さに確実に比例している」としてネルーの性急さを抑止しようとしているものと思われる。

4. 会議派組織の危機とネルー、ガンディー

1934 年 4 月にガンディーは、1930 年 3 月に始まってその後途切れ途切れになっていたサティヤーグラハ運動を停止するという声明を自らの名で出し、それは 5 月の会議派全国委員会で決定された。獄中で手にし得た新聞報道でこれを知ったネルーは、同年 8 月 13 日付のガンディー宛書簡で「今まで受けた最大のショック」と述べ、「何かが自分の内で破裂したような突然の強

烈な感覚」に襲われ、「砂漠に置き去りにされたような絶対的孤独を感じる」とまで表現している。⁽⁸⁾ この書簡で先のガンディーが述べた2人の間の「気質上の相違」という言葉に言及し、違いは恐らく気質上の相違以上だとさえ書いている。ネルーにとって「人生はすべてが論理ではなく、目的はそれに適応すべく時に変えられるべきだが、しかしある目的は常に明確に思い描かれねばならない」ものであった。あるいはガンディーは何等かの目標を持っているかも知れないとしてネルーが取り上げるのが、前にもふれた『ヒンド・スワラージ』である。『自伝』の中のこの書簡にふれた個所で、ネルーは、「未だ古い著作が彼の見解を代弁しているかどうか私は知らない」としつつも、西洋文明を否定する彼の議論は「完全に誤った、有害な教義であり、達成不可能である」と断じ、その思想の背景には「ガンディーजीの貧困、忍耐と禁欲的生活への愛と賛美」があると記している。つまりガンディーにとって、「進歩と文明は欲求の増大やより高い生活水準ではなく、慎重で自発的な欲求の制限にあり、それが真の幸福と満足を促進し奉仕の力を増大させる」ことになるのだろうが、ネルーの立場からすればそうした「貧困や忍耐の賛美」は嫌悪的であり、望ましいどころかむしろ排除されべきものでしかなかった。

ここで、しばしば取り上げられるガンディーの西洋近代文明批判について一言しておこう。たしかに『ヒンド・スワラージ』では、彼は機械、鉄道、医師、弁護士など近代西洋文明の産物を厳しく排除する。しかも彼はその後も、そこに展開した自分の議論はほとんど変わっていないと繰り返して述べている。しかし1920年代ころの彼の発言を見ると、彼を単純に反近代主義者と規定することへの疑問が湧く。例えば1925年に南インドのトリヴァンドラム（現ティルヴァナンプラム）の学生集会で語った言葉がある。

インドで（まして外国では）私は科学の反対者、敵だとの共通の迷信がある。その種の非難ほど真実から遠いものはない。…科学を正しく活用するなら、われわれはそれなしでは生きられないと思っている。⁽⁹⁾

また1927年にはバンガロールのインド科学研究所では、

私に言えることは、諸君がここで見る巨大な実験室や実験器具が幾百万の人々の（不本意で強制的な）労働の結晶であるということである。諸君が大衆への思いやりを懐き続けるなら諸君は自分の教育が依存している幾百万の人々のためにその知識を活用するだろう⁽¹⁰⁾と若い科学者を激励している。また1928年には「機械の有効性」という文章で、「誰も機械には反対しない。われわれが反対するのはその誤用ないし濫用である」⁽¹¹⁾と述べている。実際、ガンディーが全国行脚のため汽車や自動車に乗り、顕微鏡でハンセン病菌や十二指腸の細胞を観察する写真はわれわれに馴染みである。また彼はシンガー・ミシンを好んだ。彼によれば、ミシンは大衆から労働の機会を奪わずに彼らの仕事の能率を高めるし、機械（器械）の奴隷としてでなく自分の意志で操作できる、そういう機械がもしあれば農村工業推進の立場からして

も決して否定し得ないということである。こうした科学および科学的精神の重視は「反近代」の姿勢とはほど遠いものと思えるが、ガンディーの言動がしばしば見る人の目に別の印象を植え付けてきたのも事実である。恐らくそこにガンディー評価の難しさがあるのかも知れない。

サティヤーグラハ運動の停止決定後、1934年9月にガンディーはハリジャン解放運動に専心することを理由に会議派との関係を絶つと声明し、役員はもとより一般党员（4アンナー党员）の資格をも放棄した。声明は「今後会議派への私の関心は、その諸原則の実行を遠くから眺めることに限定される」と述べているが、これはあくまで形式上の関係断絶宣言で、その後も指導部への助言をはじめ会議派組織内への隠然たる影響力を維持した。しかも1935年8月には改訂インド統治法（1935年法）が制定され、独立運動は新しい段階へ踏み出そうとしていた。2年後に州立法議会の選挙が予定され、会議派が初めて州政府に参加するかどうかという重要な課題が目前にあった。ネルーはこの年妻カマラーの病氣療養に付き添ってドイツに滞在していたが、ガンディーからの要請で翌年4月の会議派ラクナウ大会の議長就任を何度か躊躇したあと受け容れ、結局本人の留守中に選挙で選出された。躊躇するネルーへの書簡（1935年10月3日付）の中でガンディーは、比較的平穏だったラーホール大会に比べてラクナウはいろんな点でそうは行かないだろうと予言的に書いているが、現実には厳しい展開となる。そのラクナウ大会を前にして2月末に療養中のカマラーがローザンヌで死去し、ネルーは3月に帰国した。

大会では自らの運営委員会にN. デーウ、A. パトワルドン、J.P. ナーラーヤンという3人の社会主義者を加えているが、彼らと保守的な他の委員との関係は陰悪なものであった。ネルーはその議長演説で、恐らく生涯で最も激しい調子で社会主義志向の主張を掲げ、また1935年統治法下での州政府参加への拒絶を訴えた。こうしたネルーの姿勢に対する右派指導者たちの抵抗・反発は強力で、大会開催の2か月後にV.J. パテール、R. プラサードら運営委員会の約半数になる7名が辞任する旨の文書（1936年6月29日付）をネルー宛に送っている。⁽¹²⁾ 7人は何れもガンディーに近い人たちで、結局彼の仲介で辞表は撤回するが、代表する形でプラサードがネルー宛に書いた書簡（7月1日付）の調子は極めて厳しい。同書簡は、社会主義一辺倒の議長演説の批判のみならず、ネルーが自分たちを邪魔者扱いし、会議派組織を傷つけようとしているとか、性急であってはならない、もっと現実を知るべきというような激しい言葉に満ちている。⁽¹³⁾ このあとネルーはガンディーへの書簡（7月5日付）で運営委員会内の「否定しがたい抗争」について述べ、自分が退いてより同質的な委員会が成立するのが望ましいと書いている。これに対しガンディーは7月8日付書簡で、そうなれば会議派組織自体が麻痺するような危機をもたらすだろうとして辞任を思いとどまらせた。続く7月15日付書簡では、辞任を表明した彼らには「君のような勇気や率直さがなかった」と分析し、「彼らは君の力強さとイン

ド人大衆や青年への君の影響力を十分に意識している。彼らは君なしではやっていけないことを知っている。だから彼らは譲歩したのだ」と書いているが、恐らくこれは真実をついた評言であろう。その次の行で「私は出来事全体を悲喜劇的事件（tragi-comedy）と見ている」と付け加えているが、双方とも（3 人の社会主義者を除いて）自分に極めて近い存在であったから、確かにガンディーのそのような表現も頷ける。

このあと 1937 年 1～2 月に行われた州議会選挙では会議派が大勝し、7 州で会議派の単独政権、2 州で会議派中心の連立政権が成立した。1935 年統治法によって州自治が約束された上での選挙であり州政府の樹立であったが、インド総督と彼の任命になる州知事の強権下で植民地支配への協力になりはしないかと懸念するネルーは当初これへの参加に否定的であった。しかし会議派内の強力な右派勢力とガンディーの説得で、彼も結局会議派の州政府参加に踏み切った。翌 1938 年の会議派ハリブラー（当時ボンベイ州）大会の議長に選出されたのは、ネルーとともに党内の急進派を代表したベンガル州出身のスパース・チャンドラ・ボースであった。ガンディーもその選出に協力した。しかしボースは翌 1939 年のトリプリー（当時中央州）大会でも議長選挙に立候補し、ガンディー推薦の候補者を破って当選して彼の不興を買った。ボースの運営委員会は成立したものの、ガンディーの働きかけで 15 名から成る委員会メンバーの内 12 名が辞表を提出し、ネルーも後にこれに準じた。3 月に病気のまま大会に臨んだボースは、悲痛な議長演説を読み上げたあと 4 月には議長を辞任した。⁽¹⁴⁾ 会議派にとっては従来にない異常な事態であった。

5. 第2次世界大戦期のネルー、ガンディー

しかし 1939 年 9 月初頭のドイツによるポーランド侵攻、続く英仏の対独宣戦布告で第 2 次世界大戦の勃発を見ることとなり、インドの政治状況は巨大な衝撃を受けた。これ以後、戦争という最大の「暴力」を前にガンディーを中心とする会議派は大きな試練に向き合わねばならなくなった。ガンディーは戦雲が近づく同年 7 月 23 日、ヒトラー宛に書簡を書き、「人類を惨めな状況に陥れる戦争を防止しうる世界で唯一の人間」と彼に呼びかけ、彼の声に耳を傾けるよう求めた。⁽¹⁵⁾ この書簡はインド国内でイギリス側に没取されて宛先に届かないが、この段階では未だヒトラーへの微かな期待もあったようである。インド総督リンリスゴウは戦争勃発後直ちに、インドも自動的にイギリスとともに参戦国となったとの声明を発した。ガンディーは 9 月 3 日にリンリスゴウの呼び出しを受けて会談に臨むが、会議派を代表するのではなく個人の資格で対応するという姿勢を崩さず、彼の言葉によれば「手ぶらで、公であれ秘密であれ何らの合意にも達せず総督公邸から戻った」。ただその席で総督に対し、「純粹に人道主義的観点か

ら」英仏に同情すると述べ、⁽¹⁶⁾これが新聞に「無条件の同情」と報道されて物議を喚んだ。9月14日の会議派運営委員会は、対独戦争は民主主義と自由・独立のためとするイギリス政府に対して、戦争目的の明確化、特にその目的がインドにいかに関適用されるのかを宣言すべきとの厳しい決議を採択した。決議はインドがファシズムとナチズムを否定することは従来主張してきた通りだが、反ファシズム戦争への協力は自由で民主主義的インドであって初めて可能であるとして、独立の即時容認をイギリスに求めた。⁽¹⁷⁾会議派が英仏側に道義的支持を与えるべきとの姿勢を維持するガンディーは翌日、「何であれイギリスに与えられる支持は無条件に与えられるべきと考えるのが私一人だけと知って残念である」と新聞への声明で語った。⁽¹⁸⁾独立の即時容認をイギリスが拒否したため、会議派はこれに対して抗議し、インドを戦争と関わらしめないことを表明するため各会議派州政府に自発的辞職を指令した。⁽¹⁹⁾

ガンディーとネルーの交換書簡にも、考えの相違をめぐる両者の苦悩が強く読み取れる。恐らく運営委員会の厳しい姿勢を念頭に置いてだろうか、ネルーへの書簡（10月26日付）では、「君の私への愛情や敬意は減じていないのにわれわれの間の見解の相違は最も明白になりつつある。恐らくわれわれの歴史の上で最も危機的な時期に、最も重要な問題に関して私は強い見解を懐いている。君もまたそれらに関する強い、しかし私とは異なる見解を持っているのを知っている」と書き、今は大衆とも会議派活動家とも直接接合できないとも綴る。ネルーもこれに答え（10月30日付）、「基本的な多くの点で人生の諸問題に関わる両者の見解や対応が異なっている」ことを認めつつ、「現在の自分の見解は多くの内的角逐を経て育ったもので、その変化と成長のプロセスがもう止まったのかどうかは分からない」と吐露している。ガンディーは10月30日に「次への一歩」と題する論説を書き、イギリスは会議派がその戦争遂行に協力できない状況を作り出したのは事実だが、会議派は彼らの戦争遂行に関してこれを妨げてはならないし、自分としては市民的不服従運動（サティヤグラハ運動）を急いで進めることはないと考えているとの立場を表明した。⁽²⁰⁾新聞発表と同じ日付のネルーへの書簡でも、現在そうした運動を行う雰囲気はないと繰り返した。これに不満なネルーは当時の会議派議長プラサードへの書簡（11月11日付）で、総督が対話を続ける限り市民的不服従運動を行うことは出来ないとするガンディーの言葉は「不幸なこと」と述懐している。⁽²¹⁾

1940年1月10日に総督リンリスゴウは、イギリス政府の「インドに関する目標」は「完全な自治領の地位」であると改めて語った。⁽²²⁾その演説はガンディーを動かしたようで2月5日に総督と会見するが、こうした動きに対して「自治領の地位」の曖昧さを糾弾するネルーの態度は強硬であった。1月24日付のガンディーへの書簡で、今時の戦争が「両者とも純粋に帝国主義的思惑」に立つものであることを強調し、「帝国主義戦争にわれわれが道義的支持を与えるべき理由が分からない」とガンディーの立場を批判する。また総督の声明についても、「状況の圧力

からインドに関して何等かの曖昧な宣言がなされるけれども、帝国主義は基本的に続くし、そのための戦争も遂行され続けるだろう」と切り捨てる。ネルーは2月4日付の長文の書簡でもガンディーの対応に強い疑問を呈している。書簡は一例としてインド統治法改正による州議会の権限制限を挙げ、現実には起こっているすべてがインド（会議派）の立場をイギリス政府が受け容れる希望は全くないことを示していると訴えたあと、「（相手に対して）決してドアを閉め切らない」ガンディーの手段に「いつもの同じゲーム」を演ずるだけだと否定的評価をし、会議派が示した条件以外ではいかなる妥協もあり得ないと釘を刺している。ガンディーはこれに対して2月17日付で「いつものゲーム？」と題する反論を書いている。その中で彼はネルーの言葉を「警告」として受け止めつつも、ほんの些少な根拠でもあれば希望を失わず、敵対者の中に最良のものを呼び起こして彼を改宗させることがサティヤグラハ活動家の義務であるとの自らの固い信念を述べ、交渉の可能性に期待を繋いでいる。⁽²³⁾ しかし同時にガンディーはこの時期、会議派党員が厳密に規律を遵守し建設的プログラムを実行していると見極めた時は、市民的不服従運動宣言の責任を引き受けるとの態度も表明していた。1940年3月の会議派ラームガル（ビハール州）大会では、帝国主義戦争への協力の拒否、完全独立とインド人による憲法制定議会を通じての憲法制定を求めて、ガンディー指導下で市民的不服従運動を展開する方針が確認された。⁽²⁴⁾ 同じ3月にラーホールで大会を開いたムスリム連盟が、初めて公式にムスリム国家（パキスタン）の独立を謳う決議を採択した。⁽²⁵⁾ インドのヒンドゥーとムスリムは歴史的、文化的にも2つの異なる民族であるとする連盟議長 M.A. ジンナーの「2民族論」に基づくものである。

しかし4月以降ヨーロッパ戦線は激しく動き、ドイツ軍による北欧制圧、オランダ、ベルギー次いでパリ占領という現実を前に、ひとたびは新たに反英運動を展開させる方向を示した会議派の姿勢に変化が見られた。この時期にネルーはプラサード宛の書簡で「ヒトラーはこの戦争に勝つかも知れない。それがいつそうありそうな状況になっている」と書いている。⁽²⁶⁾ そうした時点で、外敵の侵略であれ国内的無秩序であれ、あくまで武装でなく「組織された非暴力」を武器とせよと言うガンディーに対し、ネルー、アーザード、ラージャージーらは6月の運営委員会で、会議派は非暴力原則を厳密に守らねばならないと信じ、独立運動においてはそれを極力追求するが、国防の分野にまでそれを広げることは出来ないとの立場を表明した。⁽²⁷⁾ 続いて7月の運営委員会は、イギリスに対してインドの完全独立と臨時国民政府樹立を要求し、これらが承認されれば会議派は「国の防衛を効果的に組織する努力に全力を注ぐ」との決議を採択した。⁽²⁸⁾ 議長アーザードはその後の会議派全国委員会での声明で、「国民会議派は国の政治的独立を勝ち取ることを誓った政治組織である。世界平和を創り出す機関ではない。率直に言って、われわれはマハートマー・ガンディーがわれわれに望む所まで歩みをともにすることは出来な

い」という悲痛な言葉を吐いている。⁽²⁹⁾

このあと会議派とイギリス政府＝インド政庁との間のさまざまな駆け引きが続くが、1941年12月7日（日本時間で8日）に日本軍が真珠湾とマレー半島に攻撃を加えて米英に宣戦布告したことで事態は大きく動いた。この年12月30日の会議派運営委員会はネルーら多数派の主導下で1つの決議を採択した。

イギリスの対インド政策には何ら変化は見られないが、にもかかわらず運営委員会としては、戦争の世界的抗争への発展とそのインドへの接近によって引き起こされた新たな世界情勢を十分に考慮に入れねばならない。会議派の同情は不可避免的に、侵略の対象となっており、自由のため戦っている人々に向けられている。しかし、ただ自由で独立したインドのみが民族的規模で国の防衛を引き受ける位置にあり、戦争の嵐から現れつつあるより大きな大義の推進を手助け出来るものである

という、改めて条件付きの戦争協力を打ち出した内容である。⁽³⁰⁾ プラサードやパテールらとともに戦争への参加には強く反対してきたガンディーも翌1942年1月15日の全国委員会で演説し、彼にとって非暴力（ahimsa）は独立とさえ交換できない「信条」ではあり、会議派が非暴力を放棄して戦争に加わることは過去20年の努力を取り消すことになる」と述べつつも、運営委員会の決議（1940年12月30日）を受け入れてほしい、「家（会議派そしてインド）を分裂させないでほしい」と強く訴えかけた。⁽³¹⁾ ヒンディー語によるこの長い演説は起伏が多く読者に分かりにくい点があるが、彼の複雑な心境が伝わってくるようでもある。同演説の次の部分は、彼とネルーとの関係を端的に示すものとしてしばしば引用される。

パンディット・ジャワーハルラルと私は疎遠になっているという者がある。これは根拠のないことである。ジャワーハルラルは彼が私の網に入って以来ずっと私に抵抗してきた。君たちがいくら杖で叩いても水を分割することは出来ないのと同様に、われわれを分かつのは難しい。私が常に言ってきたことだが、ラージャージーでもサルダール（パテール）でもなくジャワーハルラルが私の後継者となろう。彼はその心の中の最高のことを話すが、常に私が欲することを行う。私が亡くなれば彼は私が現在やっていることをするだろう。そして彼は私の言葉もしゃべるだろう。…結局彼は私の言葉をしゃべらねばならないだろう。そういうことが起こらなくても、少なくとも私はこの信念を抱いて死ぬつもりである。⁽³²⁾

1941年末以降、戦況はインドの政治状況にさまざまな影響を与えるが、特に日本軍の侵攻がインドに及ぶ気配が見え始めるとイギリス側に動揺が生じた。イギリスはインドの全面的な協力が必要と考え、1942年3月に国璽尚書スタッフォード・クリップスを派遣した。クリップス提案は、インドに対する自治領の地位付与を初めて公式に言及したものであったが、自治の付与は戦後とされ、即時独立を求める会議派とパキスタン建国の確約がないとするムスリム連盟

の何れもがこれを拒絶した。イギリスの政局打開策に絶望した会議派は 1942 年 8 月 8 日の全国委員会で、イギリスの撤退とガンディー指導の非暴力的大衆闘争を呼びかける「クウィット・インディア」決議を採択した。⁽³³⁾ インド政庁はその翌早朝ガンディー、ネルーら会議派中央指導部を逮捕し、運営委員会や全国委員会の組織を非合法化した。この時点から約 3 年間、2 人の間で書簡のやりとりはない。

6. インドの将来をめぐる

ガンディーは逮捕後、プネー市郊外にあるアーガー・ハーン宮殿に幽閉されていたが、1944 年 2 月に同じく捕われていた妻カストゥルバーが死去し、75 歳で病弱になっていたこともあり刑期終了前の同年 5 月に釈放された。ネルーの釈放は翌年 6 月中旬で、彼にとって 9 度目の投獄生活は 1040 日と長かった。釈放後の両者間の文通はネルー釈放直後に交わされた、消息を伝えるだけの短い電報であった。それは、約 1 か月後にはイギリスの総選挙で成立するアトリー政権がインド問題の「恒久的解決」を掲げて、インドの中央・州立法議会選挙実施と自治憲法作成を目指す制憲議会の設置を提起する、正にそういう時期であった。釈放後 7、8 月の 1 か月間をネルーは娘のインディラーとともに先祖の地カシミールで過ごした。ガンディーへの書簡（1945 年 7 月 30 日付）では、数千メートルの高度でトレッキングに挑戦し氷河の淵を歩いたりする毎日を送って多くの悩みや心配事は遠くのものになったと、その時の爽快な気分を伝えている。これに対するガンディーの返事（8 月 8 日付）も「君の書簡は楽しい。完全に回復して戻っておいで」と大変やさしい。

しかしそうした穏やかな対話の一方で、見解が異なる問題に関してはお互いに譲らない激しいやりとりが書簡上で展開される。書簡集で言えばそれぞれが 4～6 ページに及ぶ長いものである。2 人の議論のきっかけが何であったかは不明だが、ガンディーの書簡（1945 年 10 月 5 日付）はその著書『ヒンド・スワラージ』の内容をめぐるものである。初めにスワラージ（独立）に関し 2 人の意見が異なるなら他の人々もそれを知っていた方がいいと前置きし、自分はあくまでその著書に書いたような統治のあり方に固執すると述べる。彼によれば、もしインドが、そしてインドを通じて世界が真の自由を達成するならば、われわれは遅かれ早かれ農村に行き、そこで（宮殿でなくあばら屋に）住まねばならないだろう。何故なら幾百万の人間が都市や宮殿で安逸に平穩に住むことは出来ないからである。またそこには暴力と虚偽がある。しかし真理と不暴力なしでは人間の不幸は運命づけられている。そして真理と非暴力は農村の単純・簡素さにおいてのみ見ることが出来る。その簡素さはチャルカーとそれに含まれるものに内在する。これがほぼ自著で述べた内容である。しかしその著書で述べなかったこともあると

して、次のように綴っている。

私は近代的思想を評価する一方、その思想に照らして古来のものが大変快く思える。私が今日の農村のことを言っていると思わなければ、君は私を理解できないだろう。私の理想の農村は未だ私の想像の中にのみある。結局すべての人間は自分の想像の中に生きている。この私の夢の農村では村人は怠惰ではなく、完全に自覚している。彼は不潔と暗闇の中の動物のように生きない。男も女も全世界に向き合う覚悟で自由の中に生きる。ペスト、コレラ、天然痘もないだろう。誰であれ怠惰であったり奢侈に溺れることは許されない。すべてが肉体労働をしなければならない。こうしたすべてを認めつつも、大規模に組織されねばならない多くのことを思い描くことが出来る。恐らく汽車、郵便・電報局さえあるだろう。どんなものがあるのかないのか私には分からない。私はそんなことは斟酌しない。本質的なものを確実視できれば他のものはやがてついて来る。しかしその本質的なものを断念するなら私はすべてを断念する。

『ヒンド・スワラージ』については今日なおインド内外の研究者によってさまざまに論議されているが、上記の引用に見られる晩年の考えと 1909 年の著書で展開されたそれとはどこがどう違っているのかいないのかについては今後の課題のひとつとしたい。ガンディーはこの書簡の終わりで再び 2 人の関係に話を戻し、自分たちは完全に理解すべきであることを強調する。自分たちの絆は政治的以上のものであるが、2 人ともインドの独立のためにのみ生きておりそのために死んでも幸せである。続けて「私は奉仕をしつつ 125 歳まで生きたいと願っているが、もう老人であり君は相対的に若い。君が私の後継者だと言ったのはそのためだ。私が後継者を理解し、彼もまた私を理解すべきというのは妥当なことだ。そうすれば私は平穩なのだ」と書いている。

ラクナウーへの遊説から戻ってすぐ書かれたネルーの返事（10 月 9 日付）は、ガンディーの考えをほとんど全否定する内容であった。最初に「われわれの前にある問題は真理対虚偽とか非暴力対暴力といったものではない」と簡潔に述べた上で、

全体の問題は、この社会を如何に築くか、その内容は何であるべきかである。何故村落が真理と非暴力を具現すべきなのか私には分からない。一般的に言えば、村落は知的、文化的に後進的であり、後進的環境からはいかなる進歩もなされ得ない。狭量な人々はよりいっそう虚偽的で暴力的になりやすい

と、ガンディーの気持を否定する言葉を連ねる。次いで、必要なのは十分な食料、衣服、住居、教育、衛生など最低限度の必要物をいかに迅速に獲得するかを見出すかであり、それには電力、近代的な運輸手段、重工業などの近代的諸発展が不可避であるという自説を強調する。ネルーにとっては、インドの真の独立も文化的な発展も、あらゆる分野における科学的、技術的成長

なしにはあり得なかった。同時に、現代世界に見られる国家間の対立や戦争をもたらす恐るべき食欲な傾向を脱し、孤立でなく協調を国の基礎とすべきであると付け加えている。「宮殿」云々というガンディーの議論に対して、「幾百万の人々が文化的な生活を営める快適な現代的家庭を持つてはならない理由はない」と反論する。

ガンディーが再び持ち出した『ヒンド・スワラージ』について、かつて読んで以来「漠然としたイメージしか持っていない」としながらも、

それ（『ヒンド・スワラージ』）は私には完全に非現実的に思えた。それ以後のあなたの著述や演説において、その古い立場からの前進や近代的動向への評価と考えるものを私は多く見出した。だから、古い画像があなたの心の中に未だに元のまま残っているとあなたがわれわれに言った時には驚いた

とし、そうした議論が会議派活動家が今日活動するのを妨げ、会議派と一般大衆との障壁を作り出しかねないとさえ述べている。しかし同時に、ガンディーの言うように近代文明の中で悪しき種が不可避免的に発達しているのも事実で、この悪をいかに除去し、現代の中の善なるものをいかに保持するかが重要であるとも記している。約1か月後、ガンディーはこの書簡への返書（11月13日付）を書いた。それによれば前日に2人はプネー市で会っているようで、恐らくこの件についても話されたのであろう。その時の会話からガンディーは、「われわれの見解やものの理解の仕方に余り大きな違いがないような印象を持った」としネルーの議論を整理しているが、結局のところ『ヒンド・スワラージ』あるいはインド社会の将来像に関する2人の考え方が大きく接近したようには思えない。

7. 分離独立とネルー、ガンディー

1945年末と翌年初めに中央・州立法参事会選挙が行われ、ムスリム連盟が分離ムスリム議席をほとんど独占して会議派とともにインドの2大政党としての地位を獲得した。独立を求める戦後インドの大衆的運動への対応として、イギリスは1946年3月に3人の閣僚をインドに派遣した。5月に発表された使節団の提案は連邦創設を打ち出したが、ムスリム多数州を特別扱いすることでパキスタン分離への道を開いていた。会議派と連盟は基本的に同案を了承し、7月に制憲議会選挙が行われて9月にはネルーを事実上の首相とするインド人による中間政府が成立した。しかしムスリム閣僚の任命権をめぐる両党の対立はむしろ激化していった。この時期になると、ガンディーとネルーの間の書簡は専ら政治状況の分析や助言などが内容の中心となる。それでも中間選挙樹立時に、心労が激しいネルーの健康を気遣った書簡（1946年9月3日付）も書き送っている。

1946年8月16日のムスリム連盟による「直接行動日」でカルカッタ（現コルカタ）市内で大規模な暴動が起こり、これを機にヒンドゥーとムスリムの、あるいはシク教徒を巻き込んだ衝突事件（コミューナル暴動）がビハール州や、ムスリム人口がヒンドゥーのそれを上回るベンガル、パンジャープ州など各地に広がっていく。これを取めるためにガンディーは各地に長期の行脚に出た。また3年間に4度の断食を行っている。そうした行脚として1946年11月から翌年2月のノアカリ（東ベンガル）がよく知られるが、その後も長く東ベンガルに留まるガンディーに対して、中間政府の運営で苦闘するネルーはガンディーに早くデリーへ戻ってほしいと懇願している（1947年2月10日付）。書簡では、中間政府にある会議派指導者は日常的な会議派活動に十分な時間を割けず、大衆との接触もままならないためどうしてもガンディーの存在が不可欠だと訴えている。2月20日にはイギリス首相アトリーにより、1948年6月までにインドに独立を付与するとの決定が発表された。そのことを伝える書簡（2月24日付）でネルーはムスリム連盟との交渉の行き詰まりを伝え、パンジャープおよびベンガル州の分割があり得ることを知らせ、「この重大な時点であなたの助言はわれわれを大いに助けるはず」なのに「相談するには余りにも遠く、東ベンガルから動くのを拒んでいる」と悲鳴に近い言葉を吐いている。

一方、社会的な不安定はますます予断を許さず、また会議派と連盟の関係も更に危機的になるという状況の中、会議派運営委員会は3月8日にパンジャープ州の分割を示唆する決議を採択した。会議派は終始統一インドの理念を掲げてきたにもかかわらず、「事態の急迫から確認された地域（ベンガルとパンジャープ）に適応されるべきものとして、民族自決の原則に基づく分割の原則を受け容れる」というのが決議の内容である。ガンディーはこの時未だビハールにいたが、ネルーへの書簡（3月25日付）で、会議派が「イギリス支配の間批判してきた手段を受け容れた」ことへの驚きを表明した。その原則がベンガル州にも適用されることを懸念し、「私には運営委員会の決議の背後にある理由は分からず、ただ宗教的相違や2民族論に基づくいかなる分離にも反対だという自分の意見を述べるだけ」と書き送っている。3月22日付のパテルへの短い書簡でもパンジャープ分割決議について説明してほしいと訴えた。ネルーの返事（3月25日付）は比較的淡々としている。事態の緊迫と新総督の到着日の接近、話し合うべくガンディーのデリー帰着を待っていたという事情を挙げ、パンジャープ分割について以下のように説明する。

これ（州の分割）はこれまでの決定からの自然の帰結である。これに対して以前は否定的であったが、今や決断の時がやってきており、われわれの見解に表現を与える決議の単なる採択は余り意味をもたない。…実際これがジンナーが求めるパキスタンへの唯一の返答である。⁽³⁴⁾

この間、3月14日にスウェーデンのオスロからガンディーがノーベル平和賞に推薦されたとの報告が入るが、受賞は実現せず、このことに言及した彼の言葉も残っていない。⁽³⁵⁾ 自分の知らないところで政治状況が急速に展開していくことがガンディーに大きな不安を与えていたようであり、ネルーへの6月9日付書簡では、「運営委員会と私の見解の相違を考えれば考えるほど、私の存在が不必要なものと思われる」という嘆きに満ちた言葉を記している。しかし同日、デリーでの定宿である企業家ビルラーの邸宅での祈りの会が終わったあと、恒例の講話では集まった市民を前にして、国の分割にあくまで反対であるが「民衆の考えが私のものと反対なら、自分の考えを民衆に押しつけるべきか」と自問し、自分は退くほかないと結論づけている。⁽³⁶⁾

3月22日に着任したインド総督ルイ・マウントバッテンは諸政党間の調整に努めるが、結局交渉は破れ、6月3日にインド・パキスタンの分離独立という最終的な裁定が下された。その結果、8月14日にパキスタン、15日にインドという2つの自治領が誕生した。インドではネルーが首相と外相、パテールが副首相と藩王国相の責を担うことになるが、新生国家の運営をめぐる2人の意見は激しく対立した。藩王国統合問題やチベットに関する中国との関係から、遂には首相や閣僚の権限をめぐる論議にまで及んだ。興味深いのは、2人がことある毎に状況を細々とガンディーに書き送ってその助言を求めていることである。2人はそれぞれの手記で両者間の「気質の相違、さまざまな分野での見解の相違」を認めた上で互いの不満や不信を表明し、最後にはもし2人の立場の折り合いがつかない時は「自分が内閣を去る」と異口同音に訴えている(1948年1月6日付ネルー、1月12日付パテールの各ガンディー宛手記)。ガンディーは2人の仲介者としての役を担い、1月30日に訪れたパテールに近々3人で話し合おうと約束したが、パテールが去った直後に暗殺されその機会は永久に失われた。しかしガンディー暗殺後ネルーとパテールは、「今までと違う、より困難の世界に向き合うため」「ある種の見解や気質の相違にもかかわらず、これまでずっとやってきたようにわれわれは協力すべきで、それがバープー(ガンディー)の最終的な意見だった」⁽³⁷⁾ との合意に達し、こうして新生インドを導くネルー・パテール体制が生まれた。

むすびにかえて

気質、人生観、政治観などに大きな差異があることを認め合い、同時に相互に深い敬愛と信頼感を懷き続けたガンディーとネルーの関係は正に稀有なものであった。しかし晩年、インドおよび世界の状況を前にガンディーが懷いた寂寥感も、われわれには理解し難い重さがあったのではなかろうか。例えば先にふれた「125歳まで生きる」という願望について1つの後日譚

がある。1月30日の夕方、アメリカの『ライフ』誌カメラマン、バークホワイトがガンディーのデリーにおける定宿のひとつであるビルラー邸にガンディーを訪れ、最後となるインタビューを行っている。さまざまな話題が語られる中で彼女が、当時よく知られていた話として「125歳まで生きる」というガンディーの言葉を取り上げると、彼は「その望みは棄てた。何故なら…暗黒と狂気の中で私は生きていたくないからだ」とこともなげに答えた。ガンディーが3発の銃弾に倒れたのは、インタビューを終えた彼女がビルラー邸を辞去した数時間後であった。⁽³⁸⁾

一方ネルーはガンディー暗殺の夜、ビルラー邸の前で全インド放送(AIR)を通じて、「われわれの生命の光が今や去った」で始まる有名な追悼演説を国民に向けて行った。⁽³⁹⁾ そのネルーは死後のガンディーをどう考えていたろうか。1950年代に『タイムズ・オブ・インディア』や『インディアン・エクスプレス』の編集者を務めたゴア出身のジャーナリスト、フランク・モラエスが1958年のネルーとの対談を記録している。危機や困難の時に、ガンディーならどうしたろうかと考えることがあるかとの問いに、ネルーは「率直にお答えしよう」と前置きして、「政治的であれ、個人的であれ、危機に直面するとガンディーのことを想起するが、それはむしろ自己本位な理由からである。彼が危機と相対する時に持った心の沈着さ、精神の冷静さがほしいため彼を想起する。しかし君が、ガンディーならどうしたろうかと意識的に自分に問うかと尋ねるなら、答えはノーである」と語った。⁽⁴⁰⁾ かなり本質的な部分でのガンディーとの違いを、ネルーは常に意識していたと言えるかも知れない。

<注>

- (1) Uma Iyengar and Lalitha Zackariah eds., *Together They Fought: Gandhi-Nehru Correspondence 1921-1948*, Oxford University Press, New Delhi, 2011, 558 pp.
- (2) *The Collected Works of Mahatma Gandhi* (以下、CWMG), 100 vols., Government of India, New Delhi, 1969-1997 (*Mahatma Gandhi*, CD Rom edition, 98 vols., Government of India, New Delhi, 1999、以下、CWMG, CD Rom ed.); S. Gopal ed., *Selected Works of Jawaharlal Nehru* (以下、SWJN), 15 vols. (First Series), Orient Longman, New Delhi, 1972-1982.
- (3) Pyarelal Nayar, *Mahatma Gandhi: The Last Phase*, 2 vols., Navajivan Publishing House, Ahmedabad, 1956-1958.
- (4) J. Nehru, *An Autobiography*, Allied Publishers, Bombay, 1962 (Original edition in 1936), p. 82
- (5) Indian National Congress, *Report of the Forty-Second Indian National Congress Held at Madras 1927*, The Reception Committee of the Forty-Second Indian National Congress, Madras, 1928, pp. 15-16.

- (6) M.K. Gandhi, “The National Congress”, *Young India*, Jan., 5, 1928, *CWMG* (CD Rom ed.), Vol. 41, pp. 84-85.
- (7) J. Nehru, “Presidential Address” in Lahore, 29 Dec. 1929, *SWJN*, Vol. 4, 1973, pp. 193-194.
- (8) この時のことは余程ネルーに深い衝撃を与えたようで、2 年後に出版された『自伝』でも「孤独 (Desolation)」と題する章を設け、1934 年当時獄中であって懷いたさまざまな思考を綴っている (J. Nehru, *op. cit.*, pp. 504-514)。
- (9) Gandhi, “Speech in Reply to Students' Address, Trivandrum”, *The Hindu*, March 19, 1925, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 30, pp. 409-410.
- (10) Gandhi, “Speech at Indian Institute of Science, Bangalore”, *Young India*, July 21, 1927, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 39, pp. 210-211.
- (11) Gandhi, “Utility of Machines”, *Navajivan*, August 12, 1928, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 42, pp. 354-355.
- (12) From R. Prasad and Others to Nehru, June 29, 1936, J. Nehru, *A Bunch of Old Letters*, Oxford University Press, Delhi, 1990 [1st edition in 1958], pp.188-191.
- (13) From Prasad to Nehru, July 1, 1936, *ibid.*, pp. 192-194.
- (14) S.C. Bose, “Statement on Resignation from Congress Presidentship”, 29 April, 1939, S.K. Bose and S. Bose eds., *Congress President: Speeches, Articles and Letters, January 1938-May 1939* (*Netaji: Collected Works*, Vol. 9), Netaji Research Bureau, Kolkata, 2004 [1st published in 1995], pp. 107-109.
- (15) *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 76, pp. 156-157. ガンディーはこのあとにも、1940 年 12 月 24 日付でヒトラー宛に書簡を書いている。その中で彼は、1935 年にドイツを訪問した経験を持ち 1940 年後半には大戦でのドイツの勝利を確信していたボース (Roman Hayes, *Subhas Chandra Bose in Nazi Germany: Politics, Intelligence and Propaganda 1941-43*, Hurst & Co., London, 2011, p.23) を意識していたのかどうかは不明であるが、「われわれはドイツの支援でイギリス支配を終焉させようなどとは決して望んでいない」と述べつつも、「人類の名においてあなたに戦争の停止」を訴え、同様のことをムッソリーニにも伝えたいと記している。ガンディーの秘書のデサーイーによれば、この書簡はインド内のいくつかの新聞社に送られているが、それらは「高い部局で押さえられた」という。(G. D. Birla, *BAPU: A unique association*, Vol. IV, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay, 1977, p. 188)
- (16) Gandhi, “Statement to the Press”, Sep. 5, 1939 (*Harijan*, Sep. 9, 1939), *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 76, pp. 311-312.
- (17) M. Hasan ed., *Towards Freedom: Documents on the Movement for Independence in India*, 1939

- Part 1, Oxford University Press, New Delhi, 2008, pp. 309-311.
- (18) Gandhi, “Statement to the Press”, Sep. 15, 1939 (*Harijan*, Sep. 23, 1939), *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 76, p. 326.
- (19) Congress Working Committee (hereafter CWC) Resolution, Nov. 22, 1939, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 77, pp. 121-124 .
- (20) Gandhi, “Next Step”, *Harijan*, Nov. 4, 1939, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 77, p. 63.
- (21) Nehru to Prasad, Nov. 11, 1939, V. Choudhary ed., *Dr. Rajendra Prasad: Correspondence and Select Documents*, Vol. 1, Allied Publishers, New Delhi, 1984, p. 148.
- (22) The Marquess of Linlithgow, “The Orient Club Speech”, Jan. 10, 1940, *Speeches and Statements*, Government of India, New Delhi, 1945, pp.227-230.
- (23) Gandhi, “The Old Games ?” (*Harijan*, Feb. 17, 1940), *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 77, pp. 313-316.
- (24) K.N. Panikkar, ed., *Towards Freedom: Documents on the Movement for Independence in India*, 1940 Part 1, Oxford University Press, New Delhi, 2009, pp. 4-5.
- (25) “Pakistan Resolution”, March 24, 1940 at Lahore, A.M. Zaidi ed., *The Demand of Pakistan (Evolution of Muslim Political Thought in India*, Vol. 5), S. Chand & Co. New Delhi, 1978, pp.214-219.
- (26) Nehru to Prasad, May 16, 1940, *SWJN*, Vol. 11, pp.29-35.
- (27) CWC Resolution on “Political Situation”, Wardha, June 21, 1940, K.N. Panikkar, *op. cit.*, pp. 13-14.
- (28) CWC Resolution on “Political Situation”, Delhi, July 7, 1940, *ibid.*, p. 244.
- (29) Azad on Basic Policy of the Congress at AICC meeting, Poona, July 27, 1940, *ibid.*, p. 245.
- (30) CWC Resolution on “Political Situation”, Bardoli on Dec. 30, 1941, *SWJN*, Vol. 12, pp. 50-54.
- (31) Gandhi, “Speech at AICC Meeting”, Wardha, Jan. 15, 1942, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 81, pp. 428-430.
- (32) *ibid.*, pp. 432-433.
- (33) Resolution Passed by AICC meeting, Bombay, August 8, 1942, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 83, pp. 451-454.
- (34) ムスリム連盟は、ムスリムの人口が半数以上を占めるベンガル、パンジャープ両州の全領域をパキスタン領として要求していた。
- (35) C.B. Dalal comp., *Gandhi 1915-1948: A Detailed Chronology*, Bharatiya Vidya Bhavan, Bombay, 1971, p. 156 n.
- (36) Gandhi, “Speech at Prayer Meeting”, *CWMG*, CD Rom ed., Vol. 95, p. 245.

- (37) Nehru to Patel, Feb. 3, 1948, Iyengar & Zackariah eds., *op. cit.*, pp.541-542 (Appendix VI).
- (38) Margaret Bourke-White, *Halfway to Freedom: A report on the new India in the words and photographs of Margaret Bourke-White*, Simon and Schuster, New York, 1949, pp. 227-233. 因みに、彼女と同じころインド各地で人々の姿を撮っていたもうひとりの世界的な写真家がいる。フランスのアンリ・カルティエ=ブレッソン（2004年8月3日死去）で、彼は1948年1月に生前のガンディーの写真を多数撮っているが、1月31日にガンディーと会見の約束を取っており、前日の30日夕方にはそれに関する相談のためビルラー邸を訪れた。ところが相談を終えビルラー邸を出てほぼ20分ぐらいの時間にガンディーが暗殺されたことを、少し経ってから聞かされたという（ドキュメンタリー映画『アンリ・カルティエ=ブレッソン—瞬間の記憶』[2006年]でのブレッソンの言葉）。その後彼はガンディーの死を悼む人々の写真をカメラに収めているが、最もわれわれに馴染み深いのは、ネルーがビルラー邸の前でそのニュースを全国民に伝えている写真であろう（*Henri Cartier-Bresson in India*, Mapin Publishing Pvt. Ltd., Ahmedabad, 1987, Plate 39）。
- (39) Nehru, “The Light Has Gone Out”, Jan. 30, 1948, *Jawaharlal Nehru's Speeches*, Vol. 1, Government of India, New Delhi, 1967 (1st edition in 1949), pp.42-44.
- (40) Frank Moraes, *Witness to an Era: India 1920 to the Present Day*, Vikas Publishing House, Delhi, 1973, p. 168.